

和歌山県立医科大学 皮膚科

後期研修のご案内



Dermatology
Wakayama Med Univ

Dermatology

Regional

Educational

Academic

Medical

皮膚科学

地域

教育

研究

臨床

医局のイメージ

和歌山県唯一の大学皮膚科として、研究機関かつ最後の砦としての役割のほか、県内に市民病院や小児病院やがんセンターがないため、多種多様な疾患に対応できるよう、バランスの良い診療・研究・教育を心がけています。そのうえで、とくに悪性腫瘍、自己炎症性疾患、膠原病、そして美容の分野では独自性を発揮できるように注力しています。

当科の特徴

当科には皮膚科専門医10名、皮膚悪性腫瘍専門医1名、日本リウマチ学会専門医1名、日本アレルギー学会専門医1名、レーザー美容皮膚専門医3名、抗加齢医学専門医1名、肉腫専門医1名が在籍し、指導体制が整っているため、これらの専門医取得に必要な手技を全て学ぶことができます。例えば皮弁術や悪性腫瘍の手術手技の指導体制が確立しており、入局数年で多くの医局員が植皮や皮弁術などを習得しています。さらに炎症性疾患や膠原病患者などの全身性疾患の入院患者数が近年急速に増加しており、内科的・外科的両方の疾患の診断から治療までの全てを経験できる診療体制を取っています。ヘルペスウィルスのPCR検査や皮膚癌の遺伝子検査などの高度医療を全国に先駆けて施行し、近畿一円をはじめとして全国さらには海外より紹介患者を受け付けているため、まれな疾患を含む多彩な症例を経験することが可能である日本有数の施設となっています。

また、設備として乾癬・アトピー性皮膚炎等に対する紫外線治療機器や母斑や血管腫に対する各種レーザー、美容のための顔面皮膚計測機器を所有しています。さらに多彩な疾患に対するオプジーボやデュピクセントをはじめとした分子標的薬などの最先端医療を実施できるほか、連携施設は全て比較的大学病院から近く、common disease から稀な疾患までバランスよく経験できる病院と



なっています。

職場の働きやすさ

女性医師が多くロールモデルが多いので、チーム制でお互い助け合いながら、時短・大学院生・非常勤など家庭の状況に合わせて働くことができるようになっています。他大学や他医局の良いところを柔軟に取り入れて、頑張りたい人はどこまでも頑張る事ができる、自分のペースで個人個人が働きやすい環境を目指しています。

休暇について

勤務医は雑用が多く忙しいためになかなか休みが取れない、というイメージがあります。しかし私たちは、いたずらに労働時間を長くすることで自己満足に陥るのではなく、クリエイティブな仕事をするにはしっかりとした休養が必要であるという信念のもと、どんなに忙しくともできるだけ土曜・日曜のうちどちらかはしっかりと休みを取れるようにチーム内で調整しています。また、夏

季休暇として2週間の取得を可能とし、さらに人員に余裕があれば別の duty free 期間1週間が追加されます。このような体制により、全国より集まる難しい症例の診療に対して十分な気力体力をもって望むことができる好循環を生んでいます。

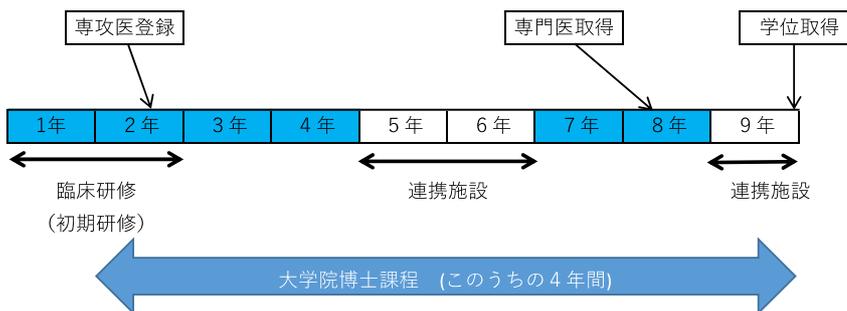
キャリアプラン

卒後1、2年目の臨床研修(初期研修)修了後、3年目からは原則、新専門医制度に準拠した「和歌山県立医科大学皮膚科専門研修プログラム」に従って研修を行います。まずは専門医取得を最低限の目標としていますが、加えて同時に大学院へ進学し学位の取得を目標とする研究活動、国内・国内留学も行うことも可能です。

ローテーション例

一般枠コース

※ は学内研修

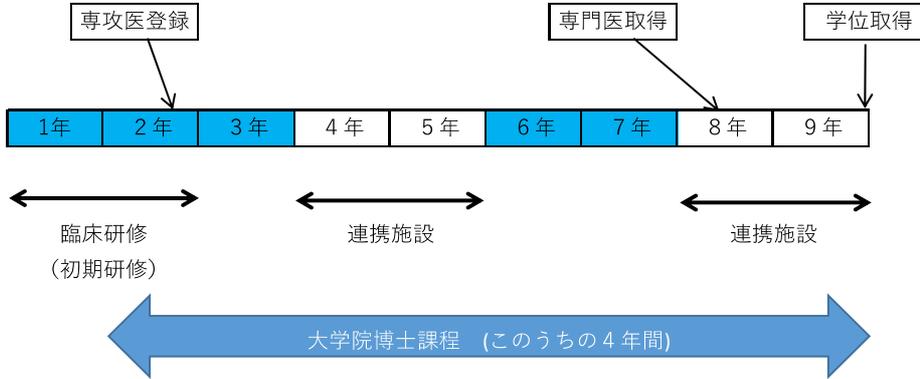


一般枠コースでは、新専門医制度における専門医取得に必要な5年間の修練期間のうち、最低1年間は日本赤十字社和歌山医療センター・和歌山ろうさい病院・公立那賀病院等の地域中核病院である連携施設で研修する必要があります。残りの期間は基幹病院である学内で修練したり、高度な医療の習得のための国内・海外留学や学位取得のための大学院への入学を積極的に奨励し、多くの実績を有しています。専門医取得後の進路は幅広く、大学病院で高度な先進医療に取り組み海外学会で見聞を広めたり、地域中核病院で指導的立場となりながら週1回は大学で診療・研究し、得意分野を持ってジェネラリスト・スペシャリスト双方の立場で活躍できる医師を目指すことができます。

ローテーション例

県民医療枠コース

※ は学内研修

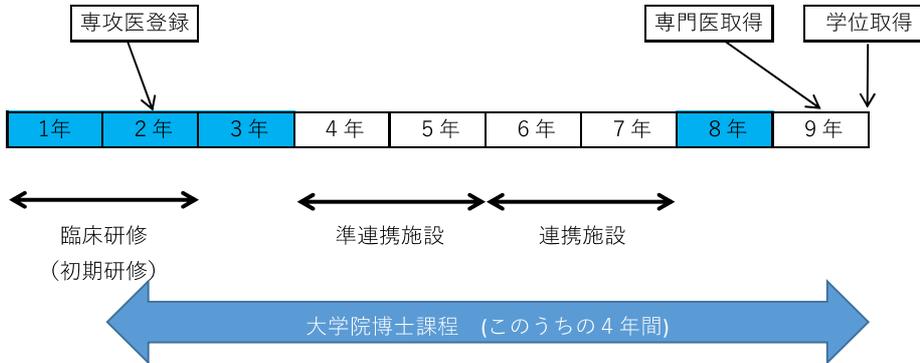


県民医療枠コースも、基本的には一般枠コースと同様ですが、義務年限を満たすために無理のない範囲でできるだけ長く地域の中核病院の勤務することが可能です。連携施設は全て症例が豊富で、比較的大学に近い地域ばかりであるため異動もしやすい場所となっています。

ローテーション例

地域医療枠コース

※ は学内研修



地域医療枠コースの医師が勤務する可能性がある病院のほとんどを準連携施設としているため、内科勤務のうち最大2年間を専門医の修練期間に算定することができます。その他、皮膚科への情熱を失うことがないように、様々な工夫をしていますし、皮膚科であれば総合医や家庭医としてのスキルを診療にも必ず活かすことが可能です。連携施設では、内科勤務の間に皮膚科の修練も可能な可能性もあります。大学院では、社会人大学院生として他施設で勤務しながら研究を行うことが可能です。

研修目標

当科での研修は以下の能力を身に付けることを目標としています。

- (1) 皮膚疾患の臨牀的・病理組織学的特徴の正確かつ詳細な記載
- (2) 適切な鑑別診断と検査計画の立案
- (3) 外用剤の使用法、消毒、処置の習熟
- (4) アレルギー疾患・膠原病などの診断から治療決定までのプロセスの習得
- (5) 外科的な基本手技(皮膚外科、熱傷・褥瘡など)
- (6) 皮膚科学に基づいた美容皮膚科の習熟

経験目標

皮膚科は、内科系・外科系をはじめ幅広い分野をカバーしているため、必ず興味のある分野が見つかります。

- ・アレルギー (アトピー、蕁麻疹、薬疹など)
- ・乾癬 (尋常性乾癬、掌蹠膿疱症など)
- ・水疱症 (尋常性天疱瘡、水疱性類天疱瘡など)
- ・膠原病 (強皮症、エリテマトーデスなど)
- ・皮膚感染症 (白癬、ヘルペスなど)
- ・良性・悪性腫瘍 (悪性黒色腫、悪性リンパ腫など)
- ・脱毛症 (円形脱毛症、男性型脱毛など)
- ・遺伝性皮膚疾患 (角化症、魚鱗癬など)
- ・母斑症 (神経線維腫、結節性硬化症など)
- ・光線皮膚科(光線過敏、色素性乾皮症など)
- ・血管炎
- ・白斑
- ・皮膚外科
- ・熱傷
- ・美容皮膚科
- ・皮膚病理

皮膚科学は難しくない

● 病気や病名が多い？

病気が多いため、興味を持てる分野や得意分野が必ず見つかります。また、「尋常性」などの漢字が難しくとっつきにくいですが、尋常性=通常の、ということなので□これか□枕詞に使われている場合は尋常ではない特殊な病型も存在するというサインになります。病名の成り立ちが分かれば、苦もなく覚えることができるでしょう。

● 病理が苦手？

病理は基本はパターン認識です。最初はとまどうこともあるかもしれませんが、慣れてくると異常な部分に自然に目が留まるようになります。また、診断力はセンスに左右されることもありますが、病理は勉強すればするほど力がつくので、診断力を助けてくれます。

● 皮膚科はマイナーで潰しがきかない気がする？

現在、たとえば内科や外科は臓器別に細分化されていますが、皮膚科は皮膚に関することは何でも扱うことから、内科的な魅力(アレルギーや膠原病など)と外科的な魅力(腫瘍や美容)の両方を兼ね備えています。アメリカでは皮膚科(Dermatology)は最も人気の診療科(ROAD)の一つで、成績がトップクラスの学生が集まりますが、日本では労せずして誰でも皮膚科に入局することができるので、アメリカ留学の際にとっても有利です。

● その他

<開業>

- ・比較的若い時期に開業することができる
- ・初期投資不要 他の診療科(内科・外科・整形・形成・泌尿器など)との相性が良く、同時開業が可能
- ・パート勤務しやすい

<臨床病院>

- 比較的若くして部長になれる
- 全国の臨床病院の女性部長の割合が10%以上と、女性も働きやすい

<大学教員>

- 熱傷や悪性腫瘍など、まれで難しい疾患も経験できる
- 海外留学/国内留学が可能
- 女性が半分以上で、非常勤医師制度が充実
- 全国的に、比較的女性教授・准教授・講師が多い。
- 女性が働きやすい環境は男性も働きやすい



和歌山県の皮膚科の状況

まだまだ皮膚科医が足りていない状況で、過剰になる恐れはありません。

皮膚科

	2018年足下充足率	2020シーリング			2021			上限ルール			10未満教済			2021年シーリング (昨年通りの計算)			2018年		2024年		2020年度専攻医採用数 (地域特需除く)	2019年度専攻医 採用数	2018年度専攻医 採用数
		シーリング数	連携プログラム数	連携プログラムのうち 都道府県限定分	シーリング数	連携プログラム数	連携プログラムのうち 都道府県限定分	シーリング数	連携プログラム数	連携プログラムのうち 都道府県限定分	シーリング数	連携プログラム数	連携プログラムのうち 都道府県限定分	2018年医師数(仕事量)	必要医師数(勤務時間調整後)	必要医師数(勤務時間補正後)	2024年の必要医師数を 達成するための年間養成数を 採用数平均	過去3年 採用数平均					
北海道	0.87															352	403	394	14	7	6	11	3
青森県	0.71															69	98	93	5	2	2	3	2
岩手県	0.63															58	93	88	6	2	2	2	1
宮城県	0.84															143	170	168	7	4	6	1	6
秋田県	0.65															52	81	75	5	2	2	0	4
山形県	0.78															67	86	81	4	1	2	1	0
福島県	0.52															73	139	134	11	2	2	3	2
茨城県	0.75															151	202	199	10	6	8	5	5
栃木県	0.84															119	142	139	5	3	2	5	2
群馬県	0.67															99	148	145	9	1	1	2	1
埼玉県	0.82															380	463	468	22	9	11	12	5
千葉県	0.76															322	425	428	23	8	10	10	5
東京都	1.53	65	11	5	54	9	2	54	9	2	54	9	2	1,586	1,037	1,043	-48	79	63	86	88		
神奈川県	1.12				14	1	1	14	1	1	14	1	1	628	581	566	4	16	17	15	16		
新潟県	0.76															133	176	169	8	4	5	6	2
富山県	0.96															76	79	77	2	1	2	1	1
石川県	1.21				2	0	0	5	0	0						102	84	83	-1	3	5	2	1
福井県	1.08				2	0	0	4	0	0						61	56	54	0	3	4	3	2
山梨県	0.79															48	61	59	3	3	2	5	1
長野県	0.61															99	162	156	11	2	2	3	2
岐阜県	0.83															122	147	142	6	3	2	5	1
静岡県	0.76															207	272	267	14	6	5	6	6
愛知県	0.95															494	523	526	16	23	27	22	20
三重県	0.82															111	134	130	5	3	1	6	2
滋賀県	0.81															79	98	98	4	3	3	4	2
京都府	1.23	9	1	0	8	1	1	8	1	1	8	1	1	229	186	184	-2	11	10	10	14		
大阪府	0.96															647	677	672	18	23	25	20	25
兵庫県	1.00				10	0	0	13	0	0	13	0	0	378	377	374	8	10	6	13	12		
奈良県	1.07				3	0	0	3	0	0						104	97	95	1	3	3	3	3
和歌山県	0.87															67	76	72	2	3	1	5	3
鳥取県	0.90															42	46	44	1	1	2	1	0
島根県	0.84															45	53	50	2	1	1	2	1
岡山県	0.97															141	145	142	3	10	12	12	7
広島県	0.92															193	210	207	7	3	6	1	3
山口県	0.83															87	105	101	4	3	5	1	3
徳島県	1.10				2	0	0	4	0	0						65	59	56	0	2	4	1	0
香川県	0.85															64	75	73	3	0	1	0	0
愛媛県	0.76															80	105	101	5	1	1	1	1
高知県	0.89															51	58	54	2	2	3	0	2
福岡県	1.06	12	1	1	11	1	0	11	1	0	11	1	0	406	381	380	5	13	13	16	11		
佐賀県	0.99															57	57	55	1	2	3	2	0
長崎県	0.97															98	102	97	2	2	2	3	0
熊本県	1.05				3	0	0	4	0	0						142	136	132	2	3	4	3	1
大分県	0.78															68	87	84	4	3	4	3	1
宮崎県	0.73															60	81	79	4	2	2	1	2
鹿児島県	0.76															93	121	115	6	1	2	2	0
沖縄県	0.88															84	95	97	4	2	2	2	2

1週間のスケジュール

		月		水	木	金	土/日
午前	9:00	外来 (予診・処置・陪席)	手術	外来 (予診・処置・陪席)	外来 (予診・処置・陪席)	手術	
	12:00						
午後	13:00	外科回診 病棟	病棟	病棟回診	病棟 レーザー外来補助	病棟	
	~19:00			病理カンファレンス 形成カンファレンス			

・外来：基本的な処置・対応など

・病棟：チーム制

・病理カンファレンス、形成カンファレンス

医局行事

●年間スケジュール

6月ごろ：研修医向け全国サマースクール

日本皮膚科学会総会

7月ごろ：皮膚外科学会

8月ごろ：免疫・アレルギー学会

9月ごろ：美容皮膚科学会

・12月：忘年会：イントロクイズと豪華景品が売りです。

●その他

縫合実習

若手医局員と研修医の先生を対象にしています

・ポーリング

若手を中心に、プライベートでも仲良くしています。



神人正寿	教授	<ul style="list-style-type: none"> ・厚生省「強皮症・皮膚線維化疾患の診断基準・重症度分類・診療ガイドライン・疾患レジストリに関する研究」班 ・厚生省「自己免疫疾患に関する調査研究」班 ・厚生省「難治性血管腫・脈管奇形・血管奇形・リンパ管腫・リンパ管腫症および関連疾患についての調査研究」班
山本有紀	病院教授・准教授・副科長、皮膚外科主任	<ul style="list-style-type: none"> ・癌治療暫定教育医 ・臨床皮膚外科学会理事 ・皮膚外科学会理事 ・美容皮膚科学会理事、上級専門医指導医委員 ・化粧品学会理事
金澤伸雄	准教授・遠隔外来担当、外来医長	<ul style="list-style-type: none"> ・免疫不全学会理事 ・疥癬ガイドライン
上中智香子	寄附講座准教授、レーザー・美容皮膚科責任者	・尋常性ざ瘡治療ガイドライン
三木田直哉	講師、研究室主任	
国本佳代	助教、病棟医長、レーザー外来、乾癬外来	
稲葉豊	助教、海外留学中	
奥平尚子	大学院生	
谷冨香	大学院生	
田中美奈子	有田市立病院	
濱本千晶	助教	
西口麻奈	助教	
坂田真里子	学内助教	
川口亜美	学内助教	
原知之	大学院生、日赤和歌山医療センター	
村岡響子	日赤和歌山医療センター	

鎗山あずさ	学内助教	
稲田有亮	和歌山ろうさい病院	
塔筋恵美	公立那賀病院	
橋本彩	学内助教	
坂本翔一	国内留学中	
瀧口道弘	学内助教	
西山幸佑	学内助教	
水崎杏奈	学内助教	
宮崎健	学内助教	
野田佑奈	学内助教	
辻岡 馨	臨床教授、日赤和歌山医療センター部長	
貴志知生	臨床准教授、海南医療センター部長	
米井希	臨床講師、公立那賀病院医長	
服部舞子	橋本市立病院部長	
土井直孝	博士研究員、皮膚外科指導、紀南病院医長	創傷・褥瘡・熱傷ガイドライン
下松達哉	和歌山ろうさい病院部長	
吉益隆	吉益クリニック、博士研究員、脱毛症外来	

主な研究テーマ

膠原病

- ・皮膚線維化疾患特異的環状 RNA の発現・機能解析
- ・強皮症・皮膚線維化疾患の診断基準・重症度分類・診療ガイドラインに関する研究
- ・自己免疫疾患に関する調査研究(特に皮膚筋炎)

自己炎症・アレルギー

- ・乳児期の噛み与えによる革新的アレルギー予防法の疫学的研究
- ・自己炎症性疾患とその類縁疾患の全国診療体制整備、重症度分類、診療ガイドライン確立に関する研究
- ・凍瘡様皮疹を呈する自己炎症性疾患における新規遺伝子変異同定と病態解析
- ・新規遺伝性インターフェロン制御異常症の同定と解析
- ・Psmb8 変異導入中條-西村症候群モデルマウスの解析

皮膚腫瘍

・免疫チェックポイント阻害薬による免疫関連有害事象 皮膚障害の実態と追跡調査

・悪性黒色腫特異的融合遺伝子の同定および機能解析

・難治性血管腫・血管奇形・リンパ管腫・リンパ管腫症および関連疾患についての調査研究

・乳児血管腫の病態に関連するバイオマーカーの探索的研究

美容

・アロエステロール経口摂取による皮膚バリア機能向上

・空気圧によるヒアルロン酸拡散注入機器を用いた顔面萎縮性痤瘡瘢痕に対する治療

医局員の声

・カンファでの iPad や学生指導でのスマートグラスの活用など、IT 環境は充実していると思います。

・上級医に相談しやすく、またその結果を教室で共有できるシステムを作っています。

・医局のロゴが格好いいです。

・若手が多いので、みんなで学ぼうという雰囲気があります。

・国際的にも活躍されている上級医が熱心に指導していただけます。ロールモデルとして目標にすることができます。

・日常診療はもちろん、基礎研究や臨床試験も頑張る雰囲気があります。

その他

・医局 HP

<https://www.wakayama-med.ac.jp/med/hifu/derma/derma.html>

・医局 facebook

<https://www.facebook.com/dermadream2015/>

・皮膚科学会 「医学生・研修医の皆様」

https://www.dermatol.or.jp/modules/youngdoctor/index.php?content_id=1

もご覧ください。

教授からのメッセージ

まず一般論として、医者として生きていくには大きく分けて大学病院、臨床病院、そして開業の3種類しかありません。

しかし、医学部新設や定員増加が日本の人口の減少と相まって医師が過剰になり、今後生き残るのが難しくなる可能性があります。そんな中、自分はこうだと視野を狭くすることなく、上記の色んな選択肢をできるだけ維持するような働きかたをしておくべきではないでしょうか?当科は今の時代のニーズにあわせて、知識や技術を伝える教育機関、勤務環境を改善する労働組合であると同時に、多彩なロールモデルを提供できる場であると自負しています。学会出張や急病、産休の際にはお互い助け合い、大学病院、臨床病院、そして開業のどの道に進んでもお手伝いできる医局です。



教室の発展に向けて、医局員一人一人がさらに活躍できる教室にしたいと考えております。とくに私の責務としては新専門医制度と来るべき生物学的製剤時代・AI時代に対する備えということになると考えています。

新専門医制度については、臨床も研究も、そして収入や休暇を含めた待遇をもっともっと良くして、小回りのきく規模の医局だからこそ皮膚科医にとってのキングダムを作りあげます。医局の力というのは結局はどれだけ多彩なロールモデルを用意できるかだと思いますので、医局員を増やし関連病院を増やすことで、他大学からも企業からも注目していただけます。研修医や学生さんには、皮膚科というは内科的なものから外科的な分野まで、実に幅広いのでみんななど

れかには興味が引かかることを知ってもらい、皮膚科の特性として臨床と研究と家庭のワークライフバランスがよく頑張りたい人は自分のペースでどこまでも頑張ることができる環境で、優秀な人材を医局に入れていきたいです。

そしてAIについては、皮膚科医にとっては最終目標は診断ではなくあくまで治療なので、AIの出現をむしろ診療補助に使うことができると個人的にはやや楽観的に考えていますが、いずれにせよ診断学はどの診療科でもかなり変容する可能性があります。AIにできないのは手術などの手技と研究でしょうから、医局員には少なくともどちらかはできるようにして頂きたいなと思います。私は試験管を振るだけが研究ではないと考えていて、臨床研究も立派な研究です。加えて、これから生物学的製剤が全盛の時代を迎え、たとえ開業医であっても分子生物学的な知識がないとも診療ができない時代がきます。開業した後に講演会で最新の話聞いても若い時に最低限の知識がないとなかなか理解が難しい。その基礎を作るために、開業志向があるなら、だからこそ基礎研究をした方がいいのではないかと考えています。

指導体制については、医局員の数の割には例年の皮膚科学会総会における教育講演の数は全国でもトップクラスで、一騎当千のスタッフが揃っています。私は野球が好きなのですが、たとえば高校野球では地元出身者を中心とした高校が全国から有望選手を掻き集める東京や大阪や横浜の高校と互角に戦えるのが魅力で、我々の胸を熱くするわけです。もっと言うと、プロ野球の世界でもとくに育成システムが確立していて秀でる広島や日本ハムはいわゆる金満球団と互角以上に戦っています。スポーツと皮膚科は違うというのは簡単ですが、他業種での育成システムを既成観念にとらわれずに導入していきたいです。

そして全ての疾患・患者に教科書レベルまでの最低限の対応ができ、また地域医療にも対応できる力が必要です。これは普段のカンファレンスや勉強会を通じて意識を高めていくことになります。また皮膚科の診療においては他科からのコンサルトに対する診療技術は必須であり、皮膚科医は診察室で皮疹という情報をよそよりも一つ多く得ることができて最も生検しやすい臓器であることから他科の全身疾患の確定診断に貢献することで他科から信頼されるような診

療科になるべく鋭意努力します。たとえば、膠原病では皮膚科が絶対に責任を負わなければいけないケースが多いです。

そして、地域に皮膚科がなく、他科で皮膚疾患の治療をされていることがとても多いのが気になっています。それに対して、和歌山医大では遠隔医療にかなり力を入れています。それを有効利用したいと考えており、私自身も週1回遠隔外来をしています。遠隔医療にはまだ保険点数がついていませんが、すでに中医協でも議論が始まっております。皮膚科は遠隔医療と相性がいいはずなので、そのノウハウを早めに積み上げて他大学に発信できるようにしたいです。



君の入局を待っています！

連絡先（担当者）

e-mail: wakayama.dermadream@gmail.com（上中智香子）